

ギネス記録！船頭重吉の484日 －江戸時代の世界最長海上漂流記－

令和6年1月27日(土)～令和6年4月7日(日)



江戸時代後期、船頭重吉を含む14人の水夫を乗せた督乗丸が嵐にあい、太平洋を漂流しました。外国船に救助されるまで、舵も帆も失った弁才船が大洋を漂うこと実に484日間。水夫たちのこの苦難の日数が、世界最長海上漂流記録としてギネスに登録されていたことが2023年春、重吉の会の調べでわかりました。常に「世界でもっとも長い」と語られてきた督乗丸の漂流日数が、公の記録として認められたのです。そんな船頭重吉の漂流を世に広めたのが「船長日記」です。この書物が広く愛されてきたのは、作者の池田寛親が、重吉の経験が人が生きていく何かしらの教訓となることを願い、多くの人に読んでもらえるように意識したからです。

本展では、漂流した484日を中心に、船頭重吉が苦境をいかにして乗り越えたかを紹介します。重吉の経験をとおして、池田寛親が願った「人生の何かしらの教訓」が皆さまに届くことを願っております。

1章 「船長日記」が伝える重吉物語

「船長日記」

「船長日記」は、尾張の廻船督乗丸船頭の重吉が、484日間にわたって漂流し外国船に助けられ苦難の末帰国するまでの実体験をまとめた漂流記です。江戸時代後期に新城の菅沼家重臣・池田寛親が重吉から直接聞き取りをして著しました。

寛親は、重吉の体験が単なる記録ではなく人生の教訓となることを意図したため、子どもにも読みやすく世に広く伝わりました。鎖国下で外国の情報に乏しかった当時、蘭学者が外国の地理や風俗を知るために漂流者から聞き取りをした漂流記とは一線を画し、文学作品としても高く評価されています。



「船長日記」(市指定文化財)
池田寛親著 / 文政5年(1822)
新城市 宗堅寺蔵
新城市設楽原歴史資料館画像提供

佐久島出身の重吉

重吉は天明5年(1785)、船乗りである善三郎の次男として佐久島で生まれ育ちました。15歳の時から船乗りの修業を積み、知多郡半田村(現・半田市)の庄兵衛の養子となりました。庄兵衛は名古屋の廻船問屋時田家に勤めており、この養父のもとで尾州廻船の船乗りとして成長しました。

督乗丸について

督乗丸は尾張国名古屋納屋町(現・名古屋市中村区)の豪商・小島屋庄右衛門の持ち船で、1,200石積(120総ト)の弁才船でした。尾張藩の藩米や、美濃・尾張・三河の商品などを江戸に運び、江戸から尾張へは大豆や種々の道具類などを積み込み出帆しました。

督乗丸の沖船頭はもともと重吉の伯父である長右衛門でした。重吉が29歳のとき、この伯父に代わって督乗丸の仮船頭になり出帆したため、聞き書きなどには長右衛門と記されています。



船頭重吉生誕碑
(佐久島)

督乗丸 14 人の乗組員

炊	水主	水主	水主	水主	水主	水主	水主	水主	水主	舵取	賄	沖船頭	
房次郎	安兵衛	重蔵	三之助	福松	音吉	為吉	要吉	半兵衛	庄兵衛	七兵衛	藤助	孫三郎	重吉
尾張国知多郡半田村	伊豆国賀茂郡子浦	伊豆国賀茂郡子浦	伊豆国賀茂郡柿崎村	伊豆国賀茂郡伊豆子浦	伊豆国賀茂郡中野町	尾張国知多郡乙川村	尾張国名古屋矢場	尾張国知多郡亀崎村	尾張国知多郡半田村西町	尾張国知多郡半田村	尾張国知多郡半田村荒古	尾張国知多郡半田村西町	尾張国知多郡半田村荒古

沖船頭…船主ではない船長 賄…事務長
舵取…航海士 水主…船員 炊…炊事や雑用係



針筋記
文久元年(1861)
南知多町教育委員会蔵



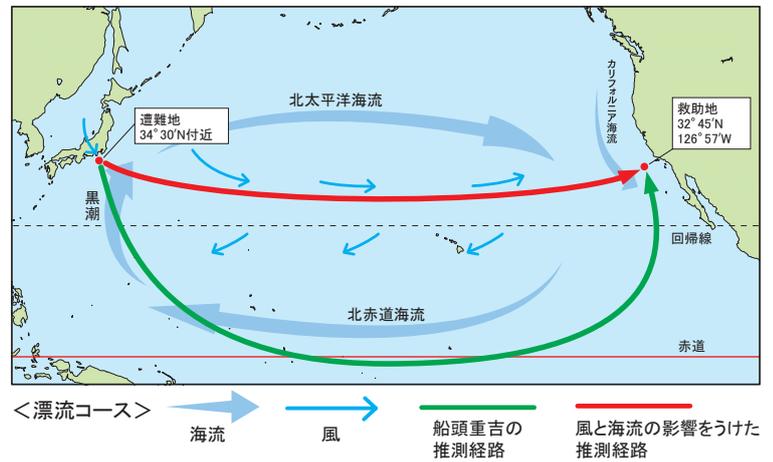
船磁石(町指定文化財)
南知多町教育委員会蔵



弁才船 模型(縮尺 1/20)/南知多町教育委員会蔵

督乗丸の漂流コース

目印も何もない大海を漂う中で重吉は、太陽や北極星の位置から督乗丸が赤道より南下したと考えました。しかし実際にはどうだったのでしょうか。海洋物理学を専門とする北出裕二郎教授によると、遭難地点と救助地点から考えたとき、督乗丸は風と海流の影響を受け主に北緯 34 度から 32 度の緯度帯を西に流されたと指摘します。



＜督乗丸漂流に関する北出教授のコメント＞

江戸時代には多くの船が遭難していたが、そのうちの幾つかは冬季の強い北西風が関係している（「北米・ハワイ漂流奇談」宮永孝）。今回対象とする尾張の督乗丸についても、伊豆半島の港を出た途端、冬の大しげに遭い、強い北西風により沖に押し出され、あっという間に遭難する羽目になったことが、「船頭日記」に記されている。

その当時、諸外国は大航海時代（15 世紀から 17 世紀）を経て、安定して航海する術を備えていた。しかし、日本では 1639 年から始まった鎖国により十分な航海術は普及しておらず、1800 年代初頭でも船に方位磁針は備えられてはいたが、陸上の目印を参考に航海が行われていた。より正確な航行を行う航海術が日本にもたらされたのは、1853 年にペリーが来航して以降のことである。

さて、これらの歴史的な史実を背景として、督乗丸の漂流経路について考察してみる。まず、大しげに遭遇したのは伊豆半島の沖で、緯度として北緯 34 度 30 分付近であろう。その後、南に流され三宅島を確認したようだが、その翌日に北西方向に高い山を見たこと。以降は八丈島も確認しておらず、船の位置はおみくじや体感による気温の情報であるため、船位に関する信頼できる情報は無い。明らかな情報は、三宅島の北緯 34 度付近で遭難し、南西や北西の風を受けながら漂流し、サンタバーバラ沖（北緯 32 度 45 分、西経 126 度 57 分）でアメリカの商船に救助されたことであろう。そこで、途中を考慮せずこの最後の緯度経度だけを確かなものとして、漂流経路を考えてみる。この緯度経度に流れ着くには、亜熱帯循環の北側を東に流れる北太平洋海流もしくはカリフォルニア海流によって流れ着く可能性が挙げられる。しかし、漂流期間の後半に卓越する北風を計測した記録が無いことから、カリフォルニア海流に乗ったとは考え難い。従って、まず、この緯度帯で卓越する偏西風や北太平洋海流により流されサンタバーバラ沖にたどり着

いたと推定できる。次に、北太平洋海流へは黒潮から黒潮続流をたどる経路以外には考え難い。つまり、最終的にたどり着いた緯度経度から推測すると、当初遭難した緯度 34 度付近とほぼ同じ緯度帯を黒潮及び黒潮続流、偏西風によって流され、途中で冷水渦*などに捕捉されつつも東へと流されて、北太平洋海流の低緯度側の比較的緩やかな流れに乗りつつ西寄りの風に押されてサンタバーバラ沖にたどり着いたと考えるのが妥当である。

重吉船頭への聞き取りの食い違いは、以下の理由によるものではないかと推測される。

- 江戸時代後半の地磁気の偏角は、日本近辺だと 0 度近くであったが、少し東に移動すると、太平洋上では 10 度以上であったことが分かっている。磁北を北と思い込んでいると常に動く海上では北極星を見失う可能性が高い。この年代は、伊能忠敬が江戸幕府の命を受け日本地図の制作に乗り出した時代である。現在の日本各地での磁気偏差は西に 6～7 度であるが、この 1800 年代初頭の磁気偏差はほぼゼロであったことが分かっている（Gauss Weber, 1830; 今道周一, 1984 など）。
- 重吉船頭の記録には、貿易風に相当する東風を受けた記録が無い。このことは亜熱帯循環の南側の北赤道海流域の緯度には到達していないことを示す。もし、南に移動していたとすれば、貿易風と北赤道海流により船は西へ流されていたはずで、黒潮に乗って本州の近くに戻されることになるため、サンタバーバラ沖には到達できない。

磁気偏差により真北を正確に把握できないと時刻が正確ではないうえに、北回帰線付近の低緯度まで南下した場合には太陽が北を回るように見えてしまう可能性もある。最後に、サンタバーバラ沖で救助した船から得た位置の情報と重吉船頭の主張の食い違いは、もはや磁気偏差だけの問題ではないことを物語っているかもしれない。

*冷水渦親流、もしくは亜寒帯循環からの冷水で構成されている渦。黒潮続流域で多く見られ、富栄養でよい漁場となることが多い。

II章 帰国後、供養碑建立のために

帰国後の重吉

文化14年(1817)、約4年ぶりに家族の待つ半田に戻ることができた重吉ですが、もはや船で生計を立てることはありませんでした。重吉は幕府から2人扶持と、尾張藩からは年間5石の米と2人扶持の給料、それから小栗の姓を与えられました。しかし供養碑建立の活動のため、早々に藩の職を辞してしまいます。そしてフォレスト号のピケット船長からもらったものやロシアから持ち帰った品物を陳列した見世物を行い、死んだ12人にちなんで1人12文の観覧料を取りました。また、陳列品の目録である「魯西亜国衣類器物披露来由書」や日露辞書ともいえる「ヲロシヤノ言」を出版して、これらもそれぞれ12文で販売しました。このような展覧会を名古屋、半田、三河、美濃など各地で開催し、供養碑を建立するための資金を集めたのです。重吉と寛親との対面は、こうした活動で重吉が三河を訪れたときにかないました。そして寛親による「船長日記」の執筆にいたったのです。



「船長日記」下巻 器物の画
新城市 宗堅寺蔵／新城市設楽原歴史資料館画像提供



「ヲロシヤノ言」
小栗重吉著／江戸時代後期
早稲田大学図書館蔵



重吉が建立した供養碑
(熱田区 成福寺)

供養碑の建立

重吉の悲願だった供養碑は、文政7年(1824)頃に笠寺観音(笠覆寺・名古屋市南区)の境内に建立されました。台座が船の形をした特徴的な石碑で、その下には漂流中に亡くなった12人の名前が彫られています。

しかし重吉の死後供養碑はいつしか廃れ、たまたま笠寺観音を訪れた成福寺(名古屋市熱田区)の住職が、「南無阿弥陀仏」と彫られた円柱が地面に埋まっているのを見つけました。そこで、笠寺観音から譲り受け、成福寺境内にある池の中に移築し現在にいたっています。昭和38年(1963)には名古屋市の文化財に指定され、近隣の学校の児童・生徒が授業で見学したり、重吉や漂流に関心のある人びとが訪れたりしています。

晩年の重吉

重吉の晩年のことはよくわかっていません。尾張藩士の家臣・水野正信が天保11年(1840)に重吉と会見したときの記録によると、大百姓の使用人頭として実直に働き、健康に暮らす内容が報告されています。一方、雲観寺(半田市)の過去帳には、風呂屋を営み、嘉永6年(1853)に69才で亡くなったことが記録されています。

積
静
心
□
正
月
嘉
永
六
年
湯
や
重
吉



雲観寺過去帳
半田市 雲観寺蔵
半田市立博物館画像提供

川章 数奇な人生を送った漂流者たちの物語

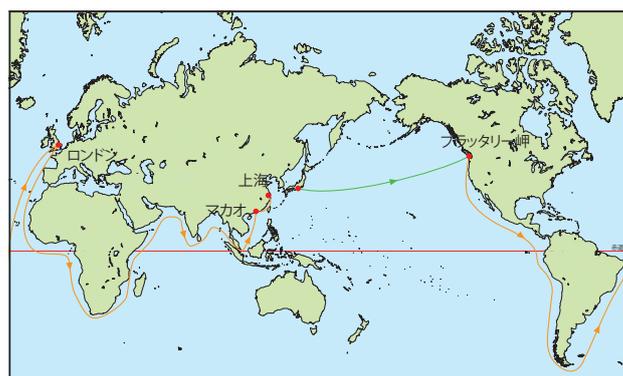
江戸時代の海運は海難の歴史

江戸時代は海運が発達し、北前船、尾州廻船など国内に物資を輸送する弁才船が活躍した一方、海難事故も非常に多い時代でした。そして江戸時代の漂流記のほとんどが弁才船の遭難によるものです。遭難後、外国に漂着したり外国船に救助されたりした者は、帰国後、キリスト教に入信していないか、あるいは密出国、密貿易を行っていないかを疑われ、厳しい取り調べを受けました。このような取り調べに対する不安と恐怖で家族に会う前に死を選ぶ者さえいたほどです。容疑が晴れても海外の見聞を口にするには決して許されませんでした。それが幕末になると逆にその知識・能力が迎え入れられ、日本の近代化に利用されるようになりました。この章では江戸時代の漂流者で知られる人物を紹介します。

江戸時代の漂流者

山本音吉 (1818～1867)

重吉の帰国後、同じく知多郡で海難にあった人物です。小野浦村(現・知多郡美浜町)に生まれた音吉は、幼少より船主樋口家で船頭としての教育を受けました。1832年、乗船した宝順丸が遠州灘で遭難、14か月後アメリカ西海岸に漂着した時には生存者は音吉を含むたった3人でした。イギリス経由でマカオに送られた後、1837年、アメリカ商船モリソン号に乗り日本へ向かうも「外国船打払令」による砲撃を受け帰国はかないませんでした。この「モリソン号事件」のショックから、自分のような漂流民の手助けをすることを誓い、移り住んだ上海で多くの日本人を援助し帰国させるのでした。語学に長け、二度にわたりイギリス側の通訳として日本へ同行し、1854年には日英和親条約の締結にも貢献しました。またマカオではドイツ人宣教師ギュツラフに協力し、聖書を翻訳しました。これは現存する最古の日本語聖書となっています。



山本音吉らの足跡 — 漂流経路 — 漂着後の経路

「宝順丸」遭難後の樋口家

樋口家の船は督乗丸の戒めから、たとえ短い航海でも多くの水・食料を船に備蓄していました。船員の安全に気を配った樋口家でしたが、「宝順丸」の遭難後は、船主としての信用ばかりでなく彼らの供養や遺族への賠償などで多くの財を失ってしまいます。漂流の背後には海難事故を起こした船主の責任や遺された者の辛さがありました。

人物	出身国	船	内容
大黒屋光太夫 (1751～1828)	伊勢国 (三重県)	神昌丸	駿河沖で遭難、ロシアの島に漂着。ロシアに8年滞在した後、女帝エカテリーナ2世に謁見して帰国を許され、根室に帰国を果たす。「ロシアを見てきた最初の日本人」として光太夫が伝えたロシアの政情などは、その後の北方情勢に少なからず影響を与えた。
中浜万次郎 (1827～1898)	土佐国 (高知県)	漁船	出漁し足摺岬で遭難、漂着した伊豆諸島で無人島生活を続けているところをアメリカの捕鯨船に救助される。アメリカの学校で航海術・造船技術などを学ぶ。帰国後は遣米使節団の一人として勝海舟らと咸臨丸に乗船するなど日米友好のために力を尽くした。
ジョセフ・ヒコ (浜田彦蔵) (1837～1897)	播磨国 (兵庫県)	栄力丸	遠州灘で遭難し漂流、アメリカ商船に救助されサンフランシスコに到着。日本人として初めてアメリカの市民権を得てアメリカ側の通訳として日本に帰国、その後の日米間の外交交渉に貢献した。日本初の新聞「海外新聞」を発刊したことで、「新聞の父」とも呼ばれる。

IV章 重吉を伝えていくために

重吉を顕彰するグループとその活動

どれほど立派な功績を遺した偉人であっても、その功績が語りつがれなければ次第に忘れ去られてしまいます。「船長日記」を記した池田寛親のように、苦境に立ち向かい乗り越えた重吉を伝えようとする活動があります。

船頭重吉を顕彰する会(半田市)

1968年発足

発起人には、日本海事史学会、衣浦港振興会会長などのほか杉浦喜之助西尾市長(当時)や徳倉六兵衛一色町長(当時)も名を連ねている。



船頭重吉を顕彰する碑(半田運河付近)

海の男 船頭重吉の会(西尾市)

2012年発足 代表 水野克宜氏

船頭重吉に魅せられ、その足跡を次代に継ぐため発足。

2012年に「船長日記」の記述を英訳し、ギネス世界記録への申請を行う。

漂流200年の節目に佐久島で「重吉サミット」を開催。この時には、半田市の「船頭重吉を顕彰する会」、「船長日記」発祥の地である新城市からも参加があり、講演会や紙芝居の実演などを行った。

重吉の会(西尾市)

2023年発足 代表 大美俊幸氏

故水野氏の遺志を継ぎ、ギネス登録を機に「海の男 船頭重吉の会」から名を変え新たに活動。地域を限定せず「重吉」の名のもとに集まれる会との思いがある。

重吉を子供たちに伝えていくために紙芝居「船頭重吉物語」を学校などで上演している。漂流後の重吉の活躍を解明する「After 484 days」をテーマとした第2回重吉サミットを開催することを現在の目標にしている。



紙芝居の上演

悲願のギネス登録

督乗丸の漂流日数はこれまで世界最長記録であると語られてきましたが、ギネス記録として認められていたことが2023年3月に明らかになりました。ギネスの申請と認定は、達成者本人または記録に関与した団体が対象です。本人として申請することができない重吉の場合は、ギネスブック研究員の調査によって「世界記録が明確になったもの」として登録されました。申請をできる立場にはありませんでしたが、重吉を顕彰する各グループによる再度にわたる働きかけと活動がギネスブック研究員を動かしたことは想像に難くありません。

世界最長海上漂流記録

記録保持者	内容
船頭 小栗重吉	484日
場所	達成日 ※新暦
日本	1815年3月24日



ギネスワールドレコードにアクセスできます

海上を漂流して生存した最長記録は約484日間で、日本人船長小栗重吉と船員音吉によるものである。彼らの船は1813年10月に日本の沿岸沖で嵐に遭い、1815年3月24日にカリフォルニア沖でアメリカ船に救助されるまで太平洋を漂流した。重吉の廻船は、鳥羽と江戸の間で数億俵の大豆を積んでいたが、強風のため帆柱を切ることを余儀なくされた。乗組員は大豆と蒸留海水で生きのびていたが、救助されるまでに乗組員のうち12人が壊血病で命を落とした。

主催 西尾市立一色学びの館

協力(敬称略)

廻船と音吉記念館、重吉の会

東京海洋大学 学術研究院海洋環境科学部門

半田市立博物館、尾州廻船内海船舶主内田家

北高山成福寺、南知多町教育委員会

※本展の企画ならびに解説シートの執筆・編集は、「督乗丸漂流に関する北出教授のコメント」を除き、当館学芸員が行ないました。



「ギネス記録！船頭重吉の484日」展示目録

No.	資料名	編著者・年代	数量	所蔵
1	弁才船 模型 (縮尺1/20)		1	南知多町教育委員会
2	霧中号角	昭和時代	1	南知多町教育委員会
3	船ランプ	幕末～明治時代	1	個人/南知多町教育委員会保管
4	船長日記 (画像) [市指定文化財]	池田寛親著・文政5年(1822)	7	宗堅寺(新城市) 新城市設楽原歴史資料館画像提供
5	船磁石 [町指定文化財]		1	南知多町教育委員会
6	針筋記	文久元年(1861)	1	南知多町教育委員会
7	船絵馬 (画像) [町指定文化財]	慶応4年(1868)	1	福浦 金刀比羅神社(石川県) 志賀町教育委員会画像提供
8	船絵馬 (画像)	吉本善京・嘉永4年(1851)	1	岩屋寺(南知多町)/半田市立博物館画像提供
9	廻船安乗録 (画像)	服部義高・文化7年(1810)	1	早稲田大学図書館
10	渡海標的 (画像)	石黒信由・天保6年(1835)	1	京都大学理学研究科数学・ 数理解析専攻数学教室図書室
11	らんびき 模型		1	半田市立博物館
12	一升栴		1	当館
13	船札		1	個人/南知多町教育委員会保管
14	船札		1	個人/南知多町教育委員会保管
15	船札		1	南知多町教育委員会
16	蕃談	憂天生(古賀謹一郎) 嘉永2年(1849)/江戸時代後期写	2	西尾市岩瀬文庫
17	蝦夷拾遺	青嶋俊蔵編 天明8年(1788)/江戸時代中～後期写	1	西尾市岩瀬文庫
18	尾薩漂民私記 (複製)	佐藤公業・文化14年(1817)	1	同志社大学
19	北高山成福寺 供養碑絵葉書		1	当館
20	督乗丸土鈴		1	北高山成福寺寄贈
21	漂流記 (机の塵)	和田長兵衛・幕末～明治時代写	1	西尾市岩瀬文庫
22	見世物雑誌 (画像)	小寺玉晁・江戸時代後期	1	早稲田大学図書館
23	魯西亜国衣類器物披露来由書	小栗重吉・文政4年(1821)版	1	西尾市岩瀬文庫
24	ヲロシヤノ言 (画像)	小栗重吉・江戸時代後期	2	早稲田大学図書館
25	過去帳 (画像)	江戸時代	1	雲観寺(半田市)/半田市立博物館提供
26	万国図	近世中期写	1	西尾市岩瀬文庫
28	覆刻 ギョツラフ訳聖書	2011年新教出版社発行(1941年初版)	2	廻船と音吉記念館
27	環海異聞	大槻玄沢・志村弘強 文化4年(1807)/江戸時代後期写	2	西尾市岩瀬文庫
29	漂民御上覧記 (漂流記)	桂川甫周 寛政5年(1793)/近世後期写	1	西尾市岩瀬文庫
30	漂客奇談	吉田正訃・嘉永5年(1852)/幕末写	1	西尾市岩瀬文庫
31	漂客夢物語	安政2年(1855)/幕末写力	1	西尾市岩瀬文庫
32	船額	江戸時代	1	佐久島個人
33	船筆筭	江戸時代	1	佐久島個人
34	知工筆筭	江戸時代	1	佐久島個人
35	すっぽん	江戸時代	1	佐久島個人